

アンナ・ゼーガース『トランジット』論

マルセイユ——想起の場、記憶の場——

Interpretationsversuch über „Transit“ von Anna Seghers

浅野 洋

ASANO Hiroshi

Präsident Chirac erklärte 1995 in der Öffentlichkeit, dass die französische Regierung für die in der Internierungslager Les Milles gefangenen Flüchtlingen, Internierten, besonders für die jüdische Leute wegen der antisemitischen Aktivität verantwortlich ist. Die vorliegende Arbeit zielt darauf ab, festzustellen, wie Marseille als die transitäre Stadt, als der Fluchtort, der Gedächtnisort, der Erinnerungsort im Roman „Transit“ von Anna Seghers zu schildern ist. Marseille, eine europäische Kluturstadt von heute, die im Sommer 1940 eine der größten Hafenstädte des unbesetzten Südfrankreichs war, ist als der Schauplatz des Textes gewählt.

Die Darstellungsweise von Flüchtlingen, Exilanten im Text „Transit“ kann man genauer als Belege für die historischen Gegebenheiten interpretieren, weil Anna Seghers selbst ihre damaligen Erlebnisse mitteilte. Sie schilderte wie sie betrachtete, das was es damals in Marseille gab. Als Ergebnis der Analyse kann man so feststellen, dass dieser literarische Text die Rolle des Erinnerungsortes noch immer aufzeigt.

1. はじめに——南仏の強制収容所と歴史の記憶——

1939年のフランスの対独宣戦布告、40年6月22日の独仏休戦協定、ナチスに加担したヴィシー政権の誕生、ヴィシー政権のユダヤ人排斥というフランス政府の立場からは隠蔽されるべき、じっさいに隠蔽され続けてきた歴史的な事件、出来事は、1995年にシラク大統領が謝罪を明確に

するまでは、ナショナル・ヒストリーとして語られてきた。つまり、それまではヴィシー政権はフランス政府とは関係のないファシスト政権であり、一部の氾濫分子による犯罪であり、評価されるべきは対独レジスタンスで戦った戦士である、というのが戦後50年間描かれてきたナショナル・ヒストリーの内実であった。しかしシラク演説により、それまでのパラダイムを転換することになり、南仏の強制収容所の存在とその役割も明確になったことが現在の歴史認識となっている。そのなかで、フランスで唯一、記念館として残されることになったレミル強制収容所は、ヴィシー政権の暗部に光を当てる役割を果たし、ユダヤ人の排斥、ナチス政権への協力、囚人のアウシュヴィッツへの搬送などをフランスの犯罪であるとして公式に認め、謝罪するという画期的な転換となった。1940年10月のヴィシー政権誕生から、たんに個人の記憶の場として存在していたにすぎなかった南仏の収容所が、ピエール・ノラが記憶の場、再記憶化の概念を提唱して以来、集合的記憶の契機のひとつとなった。¹ そこで文学作品にどれほどの再記憶化の力があるのか、記憶の中のマルセイユを作品はどのように記憶化しているのか、歴史的な記述と比較して有効性はあるのか、という基本問題を考えることで、あらためてこの視点で文学作品を分析の対象とすることの意味を問うてみたい。

2. サナリー・シュル・メール、レミル、マルセイユ

まずドイツ、オーストリアから追放されたユダヤ人、ドイツ人、オーストリア人の多くの作家は1933年から1944年の間、漁港のサナリー・シュル・メールや周辺の村々に隠れ家を求めることになった。サナリー・シュル・メールは1939年まで、ナチスから逃れてきたドイツの文学者、思想家にとって安全な場所として機能していたが、アドルノが「ドイツ文学の首都」と称した、200人を超える文学者が集結する南仏の避難所が一変するのは、フランスの降伏と同時に南仏を中心とした非占領地域にもナチス軍が侵入するとともにヴィシー政権が誕生する以降のことである。文学者、知識人を含むこれらの亡命者は、レミル強制収容所に抑留されるか、救助を求めてマルセイユに逃げのびるかはいずれかであった。つまり国外脱出の方途としては、スペイン国境のピレネーを自力で徒歩で越えていくか、マルセイユ港から出航してリスボン経由か、他の島々を経由してニューヨークを目指すか、という極めて厳しい選択を迫られた。しかし、時局の悪化

¹ ピエール・ノラ編『記憶の場 フランス国民意識の文化 社会史』 第一巻 対立（谷川稔監訳、岩波書店、2002年）

に伴い、現実には多くのドイツ人は、この休戦協定によってドイツ軍に引き渡されるのか、そのままアウシュヴィッツなどの絶滅収容所に送られるかであった。

サナリー・シュル・メールは1980年以降になってようやく、ドイツ語圏の作家、思想家が隠遁して、文学活動をしていたことを想起させ、一方でマルセイユも「ヨーロッパの文化都市マルセイユ2013年」に象徴されるように、逃亡の場所、記憶の場として歴史的な意味をもつようになった。フランス政府の歴史認識にも大きな影響を及ぼした前述の「レミル強制収容所」の役割も計りしれないものがあり、マルセイユ、レミル、ギュール、ルヴェルネなどの強制収容所の再記憶化の役割と意義はますます重要となってきたのが現状である。

具体的にレミル強制収容所の実態をみると、まずユダヤ人、外国人を収容したレミル強制収容所が2012年に、記念館として開館したさいも、フランス政府はヴィシー政府の犯罪性を公式に謝罪している。レミル強制収容所は、1939年9月にフランスがドイツに宣戦布告してからは、ユダヤ人と外国人の収容所として使われ、そのなかには多くのドイツ人の文学者、知識人も含まれ、3千人を越える収容者が拘束され、煉瓦造りに従事させられていた。その環境は劣悪で、砂埃の舞う中での労働であり、死者も数多く出ていた。この状況が、1940年6月22日の独仏休戦協定まで続き、その後はナチス政権に協力するヴィシー政権の誕生とともに反ユダヤ主義の政策が徹底されることになる。ここで重要となるのは、フランス政府は、ドイツ軍によって全土が占領される前から、とくにギュール、ルヴェルネなどの強制収容所ではドイツ人を含む外国人を積極的に収容していたという、これまで歴史学者にしか知られていなかった事実を公式に認めたことである。記憶の場、追悼の場としてのレミル強制収容所が歴史的に再記憶化されるという大転換が起こったのである。

このような記憶の場としてのマルセイユは、ゼーガースの『トランジット』のなかでどのように叙述されているのか、ゼーガース自身がおかれたマルセイユでの状況、自身のメキシコに向けての出航と合わせて論じる必要があるだろう。行く先が決まっている人間だけが留まることのできる歴史の場であることを考えれば、この『トランジット』というテキストがもつ、現在の意味、現代史的意義も明らかになるであろうし、このテキストのもつ記憶を喚起する力も明らかになってくるのではないだろうか。

クリスタ・ヴォルフは『トランジット』で描写されている状況をじっさいにマルセイユを訪問した報告書で次のように言う。「この本の根本状況というのはとても比喩的であり、今世紀の終焉にむかってもますますそうなのである。つまり微細なところまでこの根本状況は歴史的に確定でき、確定されており、こんにちでも確認できることなのである」。²

つまりアンナ・ゼーガースが『トランジット』で記述している状況は、現在のにも確認できるわけであり、根本においてなんら変わっていないことをクリスタ・ヴォルフは指摘している。この意味において、記憶の場としてのマルセイユはいまだに再記憶化として役割をもっているのであり、テキストの歴史性も明らかになるのではないだろうか。

3. 『トランジット』

——テキストの構造、語りの構造（ナラティヴ）、マルセイユの再記憶化——

3.1 作品の構造

アンナ・ゼーガースがマルセイユに滞在したのは、1940年12月30日からメキシコに向けて出発した1941年3月24日までであり、この間に出国に必要な書類を揃えては、許可がおりるまで待機する日々が続いていた。『トランジット』の記述も、おおむねこの期間の出来事の回想と報告となっている。もう一つの特徴は、読者である「あなた」との対話のなかで回想が進んでいることが挙げられよう。過去の回想を現在の時間のなかで「あなた」に伝え、過去と現在の時間の往還という構造が基本形となっている。出来事を想起し、その出来事に距離をとり意味を加えつつ、冒頭の結果に還っていく「ぼく」の事情、事の顛末を解説していく叙述のスタイルである。

テキストの結末で、ヴァイデルの妻、マリーを見送る主人公の「ぼく」がいつものカフェ、モン・ヴェルトゥーで最後の別れの挨拶を交わし、マルセイユ近郊の農場で働きながら庶民とともに生きる決意をする場面で終わる。「ぼく」はいつも通り、モン・ヴェルトゥーに腰を下ろし、うわさ話に耳を傾けるのだが、そのなかに「モントリオール」号が沈んだというニュースが耳にはいつてくる。しかし、もう難民としての「ぼく」ではないので、次の出航便のことを待ち続けることはない。この最後の場面をひきとるように、小説の冒頭は、このモントリオール号の沈没のうわさ話から始まり、回想へと向かうのである。『モントリオール』号は沈んだということで、ダカールとマルティニックのあいだで、機雷にぶつかって」。³ この循環のなかに、難民、亡命者の待機し続けることの宿命の物語が閉じ込められる構造になっている。冒頭で、「ぼく」は、この沈没した船のうわさを聞きながら、これまでの「来歴」を語り、マルセイユという記憶

² Christa Wolf, *Ortschaften* In: *Die Dimension des Autors*, Darmstadt & Neuwied 1987, S. 370.

³ Anna Seghers: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*, Band V, Berlin 1976, S. 5. (以下同様にページ番号のみを記す)

の場での出来事を説明していく。回想が始まり、最終的に農場で働くことになった「ぼく」が、なぜそのような心境となりフランスに残留することになったのか、説明を始めるという仕組みになっている。「ぼくは抵抗のときが来れば、すぐにでもマルセルとともに銃をとりますよ。ぼくがぶっぱなされたって、完膚なきまで殺してしまうなんてできるわけがない、と思うんですよ。自分はこの国のことは知りすぎているんだ、と思っているんです、仕事のこと、この国の人たち、山、桃、葡萄のこともね」。(S. 284f) この円環構造を閉じる形で、つまりフランス国内に移住し続けることでフランスの文化に根をはっていく自分を見いだし、このテキストは閉じていくわけである。「アンナ・ゼーガースのフランスとの関係は、このような矛盾した関係を超えて根本的に肯定的であった。ゼーガースはこの国を愛し、子供のころからこの国の文化を愛していた。多くのものにとっては冷静になった亡命者が経験したフランスでの7年間は、中断や断絶はなかったが、まちがいなく、亡命者の日常にある問題はあった。民衆のなかにあるこまごまとしたこと、当局のいいかげんさ、嫌がらせなどが問題であった。(略)ゼーガースは、独仏の協力関係のこと、自分の友人や夫が送り込まれたフランスの収容所における過酷で、残酷な生活条件のこと知ってはいたはずだ。だが、フランスはゼーガースにとっては特別な国であった。自由、平等が根を張っている国なのである」。⁴ テキストのなかでヨーロッパの出口として地誌的にもなんども確認されているマルセイユにおけるビューロークラシーの不毛さ、徒労感から解放されることで作品は終わることになる。おそらくこの結末は、逃亡先、亡命先であるメキシコで書いているわけであり、いつかヨーロッパに帰還するという思いがあったのだろう。

この結末に向かって、一人称の語り手が読者である「あなた」に、恐怖の理由を語りながら興味を増幅させながら作品の内実を深めていく。「どうか御辛抱のほどを、すぐ本題に入りますので。ひょっとしておわかりかもしれませんが、一度はだれかにすべて順を追って説明すべきことかもしれないのです。どうしてあんなに怖がったのか、今日では自分でも説明ができないんです」。

(S. 11) すでにドイツを追放されている「ぼく」の恐怖は、ナチスによって世界が解体される 때가迫っているのではないということである。「すべてこの秩序、この命令こそが、おそろしい大混乱を招いたといいます、血は流れ、母親たちは泣きわめき、ぼくらの世界秩序は解体するのです。でもこんな命令を伝える声の底には、なにか下賤に明晰なもの、卑劣にまっとうなひびきがあったんですよ、このように。いばるんじゃないよ！おまえらの世界がもう没落していくしかなくて、おまえらがその世界を防衛しなかったのなら、おまえらが、その世界が解体されるに

⁴ Christiane Z. Romero: Anna Seghers Eine Biographie 1900–1947, Berlin 2000, S. 278.

まかせるなら、言いのがれはよせ、さっさと、指揮はおれたちにまかせろ!」。(S. 12) ナチスの恐怖の真相を「ぼく」はこのように捉えるのであるが、この意味するところは、けっして世界が解体していく恐ろしさではなく、ナチスに解体される恐ろしさであることに注意しなくてはならない。ゼーガースがナチスの恐怖の本質を看破していることの証左である。ナチス側からみれば、もしもこの世の没落するままにまかせるのなら、ナチスの革命に任せなさい、というメッセージを伝えているのである。

3.2 解釈の歴史

『トランジット』は結局のところ、一方では名前のない一人称の語り手の物語であり、他方では反ファシズムの亡命者の運命をドキュメント風に描いた物語である。このテキストの解釈の歴史は、おおむね次のように二分され、まず「トランジット」を象徴的に理解し、ナチスの蛮行は、近代生活の無意味さの比喻であり、亡命というものは人間の遍歴を象徴している、と解釈する立場である。もうひとつは、「トランジット」の象徴性から歴史的な結末を導き出す、つまりトランジットを追ひ求めることに没頭してしまい、亡命の意味を忘れ、単に生き残ることを自己目的化してしまう。トランジットが意味しているのは、まず恐怖から抵抗へと移行すること、同時に革命的な社会変革への出発を描いている、と解釈する立場である。⁵ トランジットを象徴として捉える立場と亡命の恐怖からファシズムに抵抗する力を見い出す立場に分かれているが、前者はマルセル・ライヒ＝ラニツキーに代表されるように、世界の黙示録として捉えるような、不条理の世界、生の不可能性という実存主義的解釈である。また、もう一方は反ファシズムの作品と解釈して、社会主義リアリズムを代表する作品であると評価する立場である。この双方の解釈法からは、この作品に対するアンナ・ゼーガースの創作の方法意識は剔出できないのではないか。

『トランジット』の解釈には、ゼーガースの政治性に対する信頼性、反ファシズム的な解釈への信頼性、登場人物への信頼性を前提にしてフランス人の日常生活と抵抗運動をナチスの侵略、弾圧、不条理と対比して、対立的に描いていると解釈する立場もあるが、これは社会主義リアリズムの限界を示しているといわざるをえない。⁶

たしかにゼーガースの登場人物の描写には、このような個別的な人物描写を集めれば、庶民の

⁵ Jan Hans: Der Krise ins Auge sehen... In: Anna Seghers Text und Kritik, Nr. 38, München 1982, S. 27.

⁶ 長橋英美子: 「亡命生活のカオスのなかで——『トランジット』の示唆——」(『アンナ・ゼーガースの文学世界』(三修社、1997年)所収) 134頁。

抵抗する知恵というものも見てとれないわけではないが、『トランジット』では、ブレヒトが『シモーン』で描いたような階級対決の図式、つまりフランスの富裕層とナチス政権との癒着、独軍兵士とフランスの庶民層の連帯という闘争の図式が示されているわけではない。

ゼーガースが東ドイツに帰還してからの作品がおしなべて凡作であるというのも、階級認識に囚われた公式的な図式のなかに人物を配置する作品が多いという理由からであろう。ゼーガースの表象する力、登場人物の特性、作品の造形性というものが失なわれている、という意味で社会主義リアリズム的な反ファシズムの作品という評価がゼーガースにはついてまわることになる。

むしろゼーガースのこの問題はここで扱うには大きすぎるのではあるが、ゼーガースが東ドイツに帰還し、社会主義リアリズムを推進する作家同盟の会長職に就いて、なぜ東ドイツの社会主義体制の維持に貢献しなくてはならなかったのか、という問題と通じるのであり、ゼーガース問題とは究極的にはなにゆえに、例えばヤンカ事件を挙げるまでもなく、東ドイツでの矛盾きわまりない、ウルブリヒト、ホネッカー体制のなかで社会主義リアリズムの名のもとに、自らの位置を正当化し続けなくてはならなかったのか、という問題と連なる。つまり、東ドイツで犯したゼーガースの誤謬を抜きにしてはこの問題は考えられないのであり、ゼーガースの偉大さも、西ドイツ側から浴びせられた不当なゼーガース批判もこの点に収斂してこよう。東ドイツで築いたゼーガースの功績から、遡及的に『トランジット』を捉えては、この作品のもつ発信力、訴える力、言葉の問題、難民のディアスポラ、公式的には捉えきれない人間の深部、深層、不可思議さを剔出することはできない。つまりもっと包含するものの大きさ、人間を捉える力、作品の造形力、人物の多彩さ、語りの力、一人称で語る表象ということに注力しなければ、このテキストの意味も、現代的な意味も失なわれることになる。

3.3 記憶の場、物語ということ

ゼーガースの『トランジット』の場合、作品の舞台はたしかに1940年のマルセイユであり、数万人に及ぶ難民、フランス政府のビューロークラシーなどがテキストの構成要素になっているが、記憶の場としてのマルセイユが設定されていると理解することも可能であり、想起の場としてテキストが機能しているわけであり、記憶の集合と捉えてもよいだろう。このテキストではゼーガース固有の体験、見聞がリアリスティックに語られているわけであり、しかも、回想、想起しながら書いているという設定であることに注意しなくてはならない。この創作方法を意識化しているからこそ、不条理な扱いをされる難民、領事館の役人のビューロークラシー、不可思議さ、実存的な生の不確かさ、人間模様の多彩さなども作品の構成要素となるわけである。したがって、

ナチス侵入時のパリの描写も実体験のままの描写となる。ドイツ軍のパリ侵入の様子、その不思議な占拠の様子、鉤十字の旗がたなびく様子、占拠、占領、侵略の意味することを受けとめる「ぼく」の印象はこうである。「ぼくは先に進んでみました。パリにはいったのは日曜日の朝でした。鉤十字の旗が市庁舎のうえになびいていたのです。やつらはノートルダムの前でホーエンフリートベルガー・マーチを演奏していたのです。ぼくは不思議で不思議でたまらず、パリの町を駆けずりまわりましたよ。そしてどこに行ってもドイツの車が駐車していて、どこにも鉤十字で、すっかりうつろな気分になってしまい、もう感清というものがなくなった感じでした」。(S. 13)

また、1940年6月22日の独仏休戦協定が締結されるころのパリの雰囲気はこのように描写される。

「朝から晩まで、なんでもかんでも言い合うほかには、することがありませんでした。この国の連中にはドイツ軍の侵入がなんとも時宜にかなっていたということで、ぼくたちは完全に意見が一致してました」。(S. 14) ナチス軍の侵入時の様子を「ぼく」という難民の目を通して描写しているところに特徴があり、異民族である「ぼく」の祖国が侵入してきたことにより、自身が被害者であると同時に加害者でもあるという意識がこの文体からは窺える。「難民のトラックはひっきりなしにプールヴァール・サン・ジェルマンを渡っていき、その合間にはドイツ軍将校の鉤十字のついた小型車がうなりをあげて疾走していきました。もうプラタナスの葉がはらはらとぼくたちの上に落ちていました、その年はなにもが早めに枯れたんです、ぼくが考えたのは、これほど暇があるのは、なんともつらく、異民族のなかで外国人として戦争を体験するのは荷が重いということです」。(S. 15f)

また「ぼく」は退屈のあまり、パウルからあずかったヴァイデルの小説を読み始め、そこで書かれている小説の言語としての母国語の美しさを異国で体験し、純粹言語としての美の機能を再発見していくのであるが、ナチス軍の命令、猥雑さのなかで読むことによって母国語の再発見が可能となっていることが特徴である。「ナチの連中の咽喉から出てくる言葉のようにがらがら、ぎしぎしとは言わないのですよ、血なまぐさい命令、不快な服従の宣誓、お下劣な大言壮語の言葉ではないんですよ、あの言葉はまじめで静謐でした」。(S. 26)

ゼーガース自身も書いているように、「このなかに登場することはほとんどすべて体験したこと」⁷であり、「マルセイユのカフェで書きはじめられ、領事館の待合室でも書き、それから船上、抑留された先でも、そしてニューヨークのエリス島でも、結末はメキシコで書かれた」⁸と書い

⁷ Anna Seghers: Briefe an Leser, Berlin 1956, S. 35.

⁸ Ebd.

ている。ここでゼーガースが意図していることは、作品の素材は1940年から41年にかけてゼーガース自身が体験したことから成立し、そのほとんどは自伝的にも跡づけられるということである。登場する無数のカフェも実在していたわけであり、クリスタ・ヴォルフも指摘しているように、誤って記述されている場合もあるにせよ、それが意図的であれ、作為的であれ、1940年のマルセイユ、ナチス侵入、亡命者、難民のおかれている状況、つまり占領されていく時期における変化の様相が描かれ、亡命者、難民も全体状況のなかに巻き込まれながら、出航の準備に向けて物語を紡いでいく。

「物語るということはしめくくるといふこと」とゼーガースは書いているように、この作品における語りの構造からは、過去の物語を閉じるために、物語の内実を語りつくすという意識が如実に表われている。出航のむずかしさ、ヴィザがあっても、通貨ヴィザを要求され、完全に揃えることのむずかしさ、通過査証の入手困難をヴァイデル夫人はこう述べる。「たしかにこのヴィザは手に入れ、旅費も払いました。でもまっすぐ目的地に運んでくれる船がないのです。途中の国を通り抜けていかななくてはならないし、途中の国々には通過ヴィザを要求するんです。これには長くかかるし、なんとか手に入れるのはむずかしいのです、というわけで、すぐにでもなんとかしなければ、なにもかもむだになりかねません。確実なのはこのヴィザだけなのです。でもこれにも期限があるし、いま大事なものは通過査証なのです」。(S. 29) 亡命者にとっての不条理さは、日常のこととして描写されていくが、次の場面もきわめて官僚的な管理体制のなかで生き抜く亡命者の徒労感が描出されている。「マルセイユに出るには通行許可証が必要である。ぼくは無事に到着はしたものの、いわばもう一度到着しなければならないのだ、書類を携えて書類の上でも到着するというわけだ、法規どおりに、とね」。(S. 54) 次の引用文には、リュ・ルーヴォワの渉外局の役人の官僚的な態度が活写されており、いかにビューロークラシーが役人に染みついたものであるかを体験として描写している場面であり、じっさいにゼーガースが目当たりとした談話の複写であると、推察できる場面である。「あなたは明日発たなくてはなりませんよ。当マルセイユとしては、出発の意図があると証明する外国人だけを許しているのですから。あなたにはヴィザなどなく、ヴィザ取得の見込みさえないからね。あなたの滞在許可など延長する理由はありません」。(S. 67) 難民、亡命者には自分の意志が認められず、すべては役所、役人の指示通りであり、運命を弄ばれる一時滞在者の宿命論がここに描かれており、このフランス政府のビューロークラシーはリオン・フォイヒトヴァンガーが『フランスの悪魔』で詳細に紹介したビューロークラシーと同一の状況がここにも厳然と存在していることが分かる。⁹

ゼーガースのパリ時代を振り返ると、まずドイツからチューリヒ経由でパリ近郊に逃げのび、

そこで子供の教育に万全を期しながら、執筆活動、パリ、マドリッドでの「文化擁護のための国際作家会議」に参加し、反ファシズム戦線の構築に励むことになる。この時期にリオン・フォイヒトヴァンガー、ブレヒト、カントロヴィッツなどと知己を得たことは、作家活動に多大な影響を及ぼすことになる。執筆に励む最初の6年ほどの亡命生活、その後のナチス侵入後の逃走と逃亡の生活は、そのまま『トランジット』に反映されることになる。

パリから脱出したゼーガースは、逃亡先のパミエに滞在中にルヴェルネに収容されている夫を、生活物資を差し入れるために訪ねているが、そのたびに、通行証明書の許可が必要であった。この数か月の間にゼーガースはマルセイユの領事館に出向き、トランジットに必要な書類を言い渡されては、アメリカ領事館、メキシコ領事館から要求される必要な書類を揃えようとした。『トランジット』でも紹介されているように、ヴィザ、トランジットヴィザ（通貨査証）、出国ヴィザ（Visa de sortie）、旅券、渡航保証金などを要求され、ゼーガースはアメリカやメキシコにいる友人にこの煩雑きわまりない出国の条件について説明している。⁹

ゼーガースの友人で、同時期にマルセイユにいたアルフレート・カントロヴィッツは1940年の夏のマルセイユをこのように回想している。「マルセイユでは容易に隠れることができた。難しかったのは、そこに来ることだった。駅はすべて地方警察によって監視されていた。バスのなかは、まだ運行されている場合は、証明書は嚴重に検査され、街道でも警察のパトロールがあった。（略）1940年の夏の終わり、私はそのときはなんの騒動もなくマルセイユに到着したが、街は、海外へ逃避を願っている数万人の難民にとっては、地獄のブリュゲルの絵のような様相を呈していた。ドイツ人、チェコ人、ポーランド人、ユーゴスラヴィア人、ベルギー人、オランダ人、スペイン人がすべての領事館に押しかけ、あれこれの方法でヴィザを期待していた——ボル

⁹ アンナ・ゼーガースの亡命先での盟友の一人、リオン・フォイヒトヴァンガーがフランスのビューロークラティズム（官僚主義）を徹底して批判したのが『フランスの悪魔』であり、ヴィシー政権に権力が移行していくにつれ、抑留者たちの運命も翻弄され、宿命論に陥る亡命者の心的な状態を表した日々の記録である。報告書という体裁でありながら、「私」がレポートするという叙述法、つまり記録、ドキュメントのスタイルをとっているのが最大の特徴である。アメリカに到着後、すでにアメリカに送ってあった資料をもとに、いわば再構成する形で完成していった作品である。ナチスのフランス占領の実態、非占領地域に迫るナチス軍、抑留者の扱い、強制収容所での強制労働、衛生状態、亡命作家への処遇、ヴィシー政権の誕生とナチス政権への協力体制などの同時代史をドキュメント風に記録するという手法で書いたのが、『フランスの悪魔』であり、亡命先のアメリカから反ファシズム戦線にむけての支援のメッセージであると同時にアメリカでの反ファシズム戦線の結集を呼び掛けるという役割もあった。

¹⁰ Anna Seghers: Briefe an F. C. Weiskopf, 17. 12. 1940. In: Neue Deutsche Literatur. Berlin: 33. Jg. November 1985, S. 28.

トガル、アルゼンチン、チリ、メキシコ、中国、オーストラリアのどこへということが問題ではなかった。ヴィザの問題は障害レースの最初の段階であった。マルセイユでの期限付き滞在許可は出国の準備を目的にすることで、フランス当局への申請を可能にした」。¹¹

『トランジット』のなかでしばしば語られているカフェ「モン・ヴェルトゥー」は、実在しているカフェであり、あるべきところに存在しており、港のドックに通じるカヌビエールの入り口にあるカフェである。そう、ここに語り手は座り、旧港の水を眺めるか、もしくは水に背を向けて、何時間もじっとながめることができた。そこにゼーガース一家は、座って街路のあいだにあるさまざまな領事館や船舶事務所などをながめては、『トランジット』のなかに書き込んだ」。¹² モン・ヴェルトゥーからマルセイユを見渡す「ぼく」は海の向こうの新世界を展望する。カヌビエール通りを眼下に眺めながら作品に遠近感をあたえていると同時に、過去と現在にも遠近感をあたえている。「カヌビエールを下りきったあそこの一仕切りの青い海水ですね。あれがつまりわが大陸の端なんだと思いましたよ、世界の端なんですね、お望みなら太平洋から、ウラジオストックと中国から、ここまで延びている世界のですよ。それが旧世界と呼ばれるのも、いわれないことではありません」。(S. 64) 以下のピッツェリアの場面は、そのままゼーガースが家族とともに座って眺めたであろう旧港の夕景であり、カヌビエール通りを虚ろに上り下りする難民の群れと対照的に描写され、1940年のマルセイユはこのように強いコントラストによって描かれている。「ピッツェリアに足を踏み入れたらすぐに、この人生でぼくが解くべき難問はたったひとつなのです。あなたが今座っている席にぼくが座り、前の港に顔を向けるべきか、それともわたしが今座っている席で裸火と向かい合うべきか、ということです。どっちもいいところがありますからね。ぼくは旧港の向う側の家並みが夕空の下で漁船の帆桁を背景にしてその家々の白い正面の連なりを何時間も眺めていられました。コックが生地をたたいて捏ね、その両腕が、新しい薪がくべられた火のなかにくぐるところも、何時間もじっと見ていました」。(S. 65)

3.4 マルセイユ——記憶の領域へ

主人公の「ぼく」は、たえずカフェからカフェと渡り歩きながら、難民と街を活写していくわけだが、それは見聞したことの再現、記憶化、そして再記憶化の過程を経ながら文字化していくような書記行為であるといえよう。「語り尽くさなければ終わらない」とはこのことを意味して

¹¹ Alfred Kantorowicz: *Alptraum Marseille In: Exil in Frankreich* 1971, S. 56.

¹² Christa Wolf, *Ortschaften In: Die Dimension des Autors*, Darmstadt & Neuwied 1987, S. 370.

いる。したがって、路地裏まで、小路にいたるまで描写の対象になっているが、前述のモン・ヴェルトゥーはテキストに遠近のパースペクティブをあたえると同時に、難民たちのうわさ話の集積所であり情報交換の場となっている。「モン・ヴェルトゥーは満杯でした。カフェでぼくの耳を打ってきたのは、たくさんの外国語のお喋りでした、もう二度と出航しないという船の話、行き着いた船、難破した船、拿捕された船のこと、イギリス軍に加わろうとしている人たちやドゴール軍に加わろうとしている人たちのこと、また収容所へ戻らなくてはならなくなり、それがひょっとすると何年もかかってしまいそうな人たち、戦争で子どもを失くした母親たち、妻を残して発っていった男たちのこと。古くさくて新鮮な港のお喋りですよ、(略) はじめてぼくはそのときにまじめに考えてみたのです、過去と未来、それは見通せないという点で、ともに同等で対等なんです、領事館ではトランジットと呼び日常の言葉では現在と呼んでいる状態でも同じなんですよ」。(S. 285)

海外への渡航の準備をしているという名目によってのみ、期限付きでマルセイユに滞在することがフランス当局から許可されていた。この国を去るためには合法的な方法の可能性はなく、前述したように非合法で国境を越えるにはピレネー山脈を越えてポルトガルのリスポンを目指すルートのほかは考えられなかった。このような非合法ルートで国境を越えられたのが、ハインリヒ・マン、リオン・フォイヒトヴァンガーなどであり、ヴァルター・ベンヤミンは国境の街、ポルト・ブーで前途を悲観し自死した。これが1940年の休戦協定の前後のマルセイユの状況であり、ゼーガースはこの状況をリアルタイムで描写した。自らのパリからの脱出体験そしてマルセイユに到着してからの難民の現況を描いたのが『トランジット』であったわけである。「この街にはすでに数万人の難民が押し寄せていて、目抜き通りのカヌビエール通りやカフェは難民であふれかえり、ヴィザ、出国許可書、トランジット（通過査証）の情報交換をしながら、海外移住に希望をつなぎ、ヴィザをもとめて領事館に押し寄せていた」。¹³ 1940年のマルセイユにおける難民の関心事、うわさによって行動原理が決まっていることに注目してみると、一時的な滞在者の行動を規定しているのは、いつ出航できるのかの一点に集中し、それ以外のことは関心の外である、という異常さが支配していることが分かる。「かれらがみんなのべつしゃべっているのは、自分たちのトランジットのこと、期限切れの旅券のこと、3マイル領海やドルの為替相場のこと、出国査証のこと、そしてまたもやトランジットのことなんです」。(S. 89f) このような難民の状況は繰り返し精緻に描写され、通奏低音となってテキスト全体の様相を決めている。「あのころは

¹³ Alfred Kantorowicz: *Alptraum Marseille In: Exil in Frankreich* 1971, S. 57.

だれしも願いはひとつしかなかったんです、船で発つことですよ。怖れていることもひとつしかありませんでした、残されることです。(略)ただとにかくこの崩壊した国から出ること、この崩壊した生活からはなれること、この星を出るという話であるかぎり、そして拿捕された船やどうしても目的地に着けなかった船の話、買い取ったヴィザ、偽造したヴィザ、新しくトランジットの取れる国の話が出ると、その話し手にみんなが耳を傾けるんです。あらゆるうわさ話は、待ち時間を縮めるためなんですね、というのは、待つことで身をすりへらしているような人たちなんですから。かれらを乗せないで出帆した船が、何かの理由で目的地に着けなかった船のこと、これがみんなにいちばんのお気に入りなんです」。(S. 144)そして難民のトランジテアー(transitär)な特徴も明らかになってくる。ここであえて、ゼーガースの造語とも思える transitär を使っているのは、トランジット的なものの総称(一過性、一時的、通過的、かりそめ)を言い当てようとしているわけであるが、この言葉に難民の心的な表象が込められているといえよう。

「ぼく」は男女の愛を重くみているのではないかと聞かれ、こう答える。「ぼくが?とんでもない!ぼくは、もっと地味で、ひかえめな情熱のほうが、ずっと大事だと思いますね。ただ残念ながら、この一時的な、あやしげなものに、なにか命がけの真剣なものがはっきりと混じっているんですね、これがいつもぼくの心に障るんですよ、この世でいちばん大事なものが、ほんの一時的なもの、瑣末きわまりないものと混じり合っているんですね。たとえば、たがいに相手を見捨てないこと、これがこのあやしげな風のような、かりそめな(トランジテアー)といいなくなる問題とくっついてるんですよ、一時的ではないもの、ふわふわしていないもの、かりそめ(トランジテアー)ではないものですよ」。(S. 172f)このような表象を指して、カフカ的と評する論者も研究史のなかではみられるが、ゼーガースの場合はすべてが体験された世界の表象であり、カフカ的な虚像の世界とは異質のものであることは、次のような描写からも明らかだろう。「難民というのは避難しつづけなくてはならないのであり、急に桃をつんだりはできないですよ。滞在の延長のために、自分はここでヴィザを待っているのだという、二度目の証明が必要になったのです」。(S. 76)

以上みてきたように、独仏休戦協定からヴィシー政権成立という歴史的事象のなかで、サナリー・シュル・メール、レミル、マルセイユという個別の記憶の場が、同時期に記憶の領域へと拡がりをみせていった。ドイツの作家にとって避難所となったサナリー・シュル・メールは、もはや一時的な待避所としての機能を失ない、ナチス政権、ヴィシー政権によってレミルという、時代によってその役割を変えていった収容所¹⁴に抑留された。このことは前述したように、すでにフランスの歴史認識によって明確となった文化的、社会的な記憶であるといえよう。また、ヴィ

シー政権へのユダヤ人迫害、反ファシズム分子の追放、またはナチス政権への引き渡しが行われるに移される段階に入ると、ヨーロッパの端に位置するマルセイユは亡命先を求めて集まる難民の一時的な待機場所に変じることになった。この三地域には共有されるべき問題が潜在しており、ときに噴出する場合もあった。フォイヒトヴァンガー自身はサナリー・シュル・メールからレミル強制収容所での過酷な強制労働、獄中体験を経て、最終的にマルセイユから闇のなかを出国できたという個人的なストーリーもじつは、現在では多くの語り部によって共有されている。200人を越えるサナリー・シュル・メールに集結したユダヤ人、ドイツ人、オーストリア人の亡命作家も同様の軌跡をたどり、アメリカに向かって出帆した。南仏の漁港サナリー・シュル・メール、煉瓦工場であったレミル、古代からヨーロッパへの玄関であったマルセイユは、それぞれに役割を変えながらも、記憶の場から記憶の領域へと変質していったことになる。

4. 終わりに

亡命、逃走、追放、抑留、救済、絶滅という言葉に彩られた20世紀の闇の歴史が、記憶、再記憶化とどのように関わっているのか、関わってきたのか、という視点に立って、文学作品はいかにこの再記憶化と関わりえるのかということを考察してみた。ここで重要となるのは、1945年以降の記憶の政策であり、とりわけこの三地域では、戦後を生きのびた人たちが亡命時代の書き手として重要な役割を果たしてきたことである。この点で、オルダス・ハックスレイ、アルマ・マラー・ヴェルフエル、マルタ・フォイヒトヴァンガー、ヘルタ・パウリ、リサ・フィティコ、ルー・アルベルト・ラザールなどの芸術家、作家、その周辺の人びとの記録、回想録、発掘された文学作品などが再記憶化に貢献している。この意味でエミール・ノラがいうように、これまでの史料実証主義的な方法論を中心とする歴史研究に頼るのではなく、二次史料としての「状況証拠」も対等に扱うべきであるという視点に立てば、日記（フォイヒトヴァンガーなど）、回想録、小説（アンナ・ゼーガース、フォイヒトヴァンガー他の作品）、口承史料（インタビュー）、記念碑（サナリー・シュル・メールの記念碑）、建造物（サナリー・シュル・メールの住居、マルセイユの街路）、カフェ（サナリー・シュル・メール、マルセイユの無数のカフェ）なども対等の

¹⁴ 加藤克夫：「第二次世界大戦期フランスの『強制収容所』とユダヤ人迫害の『再記憶化』」（社会文化論集：島根大学法文学部紀要社会文化学科編 3, 2006年）

記憶の史料として分析の対象となろう。すなわち歴史的に公平に扱われるべき言説となるということである。このような記憶が集合的記憶となっていくことによって、歴史記述におけるパラダイムの変換をもたらしていくことはノラの言を俟たない。

亡命の事実と実態を個々の場所で「記憶の場」として確認することは、「国民的な記憶がきわめて明白で決定的な地点を確認すること」であり、「目に見えない紐の存在を明るみに出す」¹⁵ ことである。この意味で『トランジット』には想起の場であると同時に記憶の場としての役割もあることはその内実からも明らかであり、これが現在のフランスの集合的記憶となりつつあることは、前述の一連の政府認識、謝罪、記念館のオープンによって示されていることである。

¹⁵ ピエール・ノラ編『記憶の場 フランス国民意識の文化 社会史』 第一巻 対立（谷川稔監訳、岩波書店、2002年、19頁）